



福證寺 聖徳太子絵伝
南無仏太子

10月9日 午前
聖徳太子御移徙法要
勤行本 コラム

622年に亡くなった聖徳太子の子孫は643年、蘇我入鹿に攻められ滅亡します。

悲劇の一族として政治にしがらみがなくなった太子は、720年に完成した日本書紀では半ば神格化して描かれ、739年に太子の斑鳩宮に夢殿が建てられるなど観音菩薩の化身・仏教の守護者として信仰の対象となっていきました。こうして始まった太子信仰が底流にあって、743年に大仏建立を志した聖武天皇、光明皇后の仏教中心の治世へと実を結ぶのです。

平安時代末期、末法思想の下で救世主を求めるが如く、1121年の聖徳太子五百回忌は盛り上がりを見せます。各地方で見受けられる太子二歳像（南無仏太子）、十六歳像（孝養太子）、三十五歳像（勝曼経講讃像）、四十五歳像（摂政像）は、太子絵伝の絵解きに伴い、地方に仏教・太子信仰が伝播した証。親鸞聖人は、まさにその時代の空気の中、人生の決断をする各場面において太子の導きを受け、法然上人の念仏の教えに帰依することになりました。

時は移り、濃尾震災で全焼の憂き目にあった福證寺は、聖徳太子造の由縁を持つ阿弥陀如来像を十六代住職義城の実家である関ヶ原町真念寺より招来し、ご本尊としてお迎えすることとしました。1930年には聖徳太子千三百回忌法要を勤修し、山門と板塀を落慶。門脇の石柱には「聖徳太子御作本尊 福證寺」と今に刻まれています。

太子の事跡に学びなおすことを繰り返し、私たちは仏教に縁を導かれていることに気づきます。この度の中川大幹仏師（米原市在住）による聖徳太子像造立が、私たちの「過去」と「未来」に想いを馳せる慶びの「今」となることを願い、聖徳太子御移徙法要を勤修します。



福證寺 親鸞聖人絵伝
六角告命

10月9日 午後
聖徳太子御遠忌法要
勤行本 コラム

親鸞聖人は十九歳の秋、磯長の聖徳太子廟で夢告をうけられたといわれています。「日域は大乗相応の地」「汝の命根まさに十余歳なるべし」「善信善信真菩薩」といった聖徳太子の夢告の言葉は、「日本の仏教はこれでよいのか」、「十年のうちに結果を出さなければ…」、「真の菩薩とはどうあるべきか」という問いが若き聖人の課題としてあったことを示しています。（三夢記・親鸞聖人正明伝）

その、十年の区切りを迎える二十九歳。京都の六角堂に百日参籠された親鸞聖人は九十五日目の暁、「行者、宿報にてたとい女犯すとも、我、玉女の身となりて犯せられん。一生の間能く莊嚴して、臨終に引導して極楽に生ぜしむ」という救世菩薩の声を聞かれました。（恵信尼消息・御伝鈔）

「行者宿報偈」でないとの説もある

当時、救世菩薩は太子の本地とされていました。在家仏教者である太子より直々に僧侶が夫婦生活を行うことの認諾を得て、更に、「一切群生にこの誓願の旨趣をきかしむべし（取意）」と、僧侶が伴侶を得る仏道があること」を広く世間に宣説するよう激励を受けます。

親鸞聖人は、この六角堂参籠の後、法然上人のもとで真の仏道に出遇います。流罪の憂き目にも遭われましたが、示現のとおり東国で家族を得て、市井の念仏者として、全ての人々が救われる仏教に生涯を捧げられました。

親鸞聖人が太子に抱いていた思いは、日本という国の精神面の父母。王法と仏法、理想の君主。そして在家妻帯の仏教者の道しるべ。太子に導かれ、慶びの念仏の一生を過ごせた感謝の念が「弥陀の本願信ずべし 本願信ずるひとはみな 摂取不捨の利益にて 無上覚をばさとるなり」という聖人八十五歳、最後の夢告となって結実したのでしょう。私たち真宗門徒も聖人と同様に、精神の父母、国の在り方、在家妻帯の仏教者について学びを深めていくべきでないでしょうか。

元久二（1205）年七月二十九日、親鸞聖人は法然上人の真影の図画を許可され、讚文として「南無阿弥陀仏」「若我成仏十方衆生 称我名号下至十声 若不生者不取正觉 彼仏今現在成仏 当知本誓重願不虚 衆生称念必得往生」と善導大師の往生礼讚偈から「本願加減の文」と呼ばれている箇所をお書きいただきました。平成26年の研修旅行で訪れた岡崎市妙源寺で、この絵像と目されるものを拝見させて頂きました

教行信証後序に記載されるこの「真影図画」と「選択付属（選択本願念仏集の書写）」の出来事は、「悲喜の涙を抑えて由来の縁を註す」というほどに、親鸞聖人生涯の喜びとなりました。

そこで疑問となるのは、「聖人も弟子に同様のことを行っているのでは？」「聖人はどんなことを弟子に伝えたのだろう」という点です。これについては五十年後の建長七（1255）年六月二十二日、教行信証を書写した専信房専海が絵師の法眼朝円に聖人八十三歳の姿を描かせたものが残されています。（安城御影 西本願寺蔵）

そこには上段に願生偈（抄）、中段に無量寿経第十八願文と東方偈の一部など無量寿経下巻の抜粋、そして鏡御影と同じく正信偈の文二十句が直筆で書かれています。この度の御遠忌法要では、ほぼ全ての讚文について勤行があります。聖人が生涯をかけて伝えたかったことを御遠忌法要のお勤めでなぞらえさせていただけますよう。「何となれば、前に生れん者は後を導き、後に生れん者は前を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す（道綽禅師安楽集 教行信証後序にて引用）」御遠忌法要は、過去を知り、未来を思い、今を確かに生きる私たちの大切な仏事です。



妙源寺 法然上人御影

西本願寺 安城御影



仏教は元来、苦悩からの解放を説く教えです。老病死を内包した「生」という苦しみ、また、愛別離苦や怨憎会苦おんぞうえくといった人間関係の苦からの解脱が主たる目的です。

世界の各地では、釈尊がされたように瞑想、苦行などの方法が今も試され、釈尊亡きあとに発展し体系化した人間を知るための学問（仏教学）も大いに学ばれています。いずれにしろ、それらの行は、「我執」という「こだわり」に気づき、あるがままに物事を受け止めるために行うという方向性を持っています。

親鸞聖人の念仏の教えは、「こだわりがどうにも捨てられない」という悲しい身の事実を誤魔化さずに見据え、全ての人を共に学び合っていく凡夫としてつながりあっていく人生を歩むことのできる唯一の道として開かれました。親鸞聖人の伝統を継ぐ私たちは、小さい頃より先達に導かれて手を合わせ、正信偈・和讃をお勤めし、仏教のお話に耳を傾けることのできる人生を賜りました。

仏法の道はいつも私たちの目の前にあります。一方で、仏さまの教えに素直になれない自分があります。ともに学ぶ朋がいます。一方で、朋と腹を割って話せない自分があります。今日もお話を聞かせていただきこう。お勤めをさせていただく。そうやって生きてきた真宗門徒の生活が、コロナ禍を一つの契機に変わっていくのを感じています。

苦を感じる前にまず逃げましょうという指針をよく聞くようになりました。

学校、会社、家庭、他人、親戚、近所付き合ひ、我慢して命を削ることはないでしょうと言われます。健康寿命を延ばすことが今や人生の目的のようでもあり、いよいよ生活が難しくなれば早くお迎えが来て欲しいと無理を言う。仏教の願いのとおりに苦から解放されてはいるが、いつの間にか健康な生の享受だけが人生の目的となり、過去も未来も、他人もお構いなしとなっではいけないでしょうか。釈尊は苦から逃げたものではありません。苦を引き受けて、その苦を苦と感じない生き方こそ、かけがえのない人生につながることを覚られたのです。

コロナ後の新しい暮らしが始まります。お寺も考えます。これからも共に考え、共に学んでまいりましょう。